

令和4年度

大学院看護学研究科FD研究会報告書



自治医科大学大学院看護学研究科
FD評価実施委員会

令和 4 年度大学院看護学研究科 F D 研究会報告(案)

大学院 FD 評価実施委員会・研究推進委員会

テーマ：混合研究法の特徴を理解し、研究指導に役立てよう！

1. 目的：混合研究法の特徴および看護研究における理解を深め、院生の研究指導に役立てる。
2. 日時：令和 5 年 3 月 8 日（水）13 時 15 分～15 時 35 分
3. 方法：遠隔講義（Zoom） *録画あり
4. 講師 亀井 智子 氏

(聖路加国際大学看護学研究科老年看護学教授/日本混合研究法学会理事)

講演テーマ：「看護研究における混合研究法活用のすすめ」

5. 参加者数 50 名（申込数 54 名、不参加 4 名）
 - 1) 博士課程（前期・後期）の教育に関わっている教員（必須）：23 名（参加率 100%）
 - 2) 博士課程（前期・後期）の教育に関わっていない教員：19 名
 - 3) 教員博士課程（前期・後期）の院生、科目履修生、修了生：院生等：8 名
(内訳 博士後期課程修了生 1 名、後期課程 3 名、前期課程 1 名、科目履修生 2 名、特定行為研修生 1 名)

6. プログラム

司会進行 大学院 FD 評価実施委員 川野 亜津子

時間	内容	備考
13：15	開会の挨拶および講師紹介 大学院 FD 評価実施委員長 里光やよい	*Zoom 入室時は氏名の前に、教員、院生、修了生などを記入
13：20～15：00	講演テーマ 「看護研究における混合研究法活用のすすめ」 亀井 智子 氏	
15：00～15：10	休憩（10 分）	
15：10～15：30	質疑応答（20 分）	
15：30～15：35	閉会の挨拶 看護学研究科長 春山 早苗	

7. アンケート結果（大学院に関わっている教員のみ）

- 1) 概要 回収数 18 (回収率 78.2 %)

1.混合研究法の特徴,看護研究における混合研究法についての理解 (n= 18)

大変深まったく	深まったく	あまり深まらなかった
14 (77.7%)	4 (22.2%)	0

2.自身の研究指導力の向上につながると感じたか。 (n= 18)

非常につながる	ある程度つながる	あまりつながらない	該当なし
9 (50%)	7(38.8%)	1 (5.5%)	1 (5.5%)

3.本研究会の運営は適切だったか。 (n= 18)

適切だった	工夫が必要
16(88.8%)	2(11.1%)

2) アンケート自由記述

(1)研究指導力の向上について

<非常につながる> 4 件

身边に感じられた、イメージしやすかった、今取り組んでいる研究の分析方法を学ぶことができたなどの意見があった。

＜ある程度つながる＞ 6 件

説明がわかりやすかった、混合研究法と量と質の研究に対する理解が深まった、研究デザインなどを活用することが出来る、指導の幅を広げるきっかけになったなどの意見があつた半面、指導に活用できるまでにはもう少し理解を深める必要があるとの意見があつた。

＜あまりつながらない＞ 1 件

自分で混合研究法を用いて研究をまとめてみないと指導はできないとの意見があつた。

(2)研究会運営について

＜工夫が必要＞ 2 件

研究会の対象者が大学院を担当する教員であるのか、大学院生であるのかが明確ではなかった。例えば、質問をまず大学院生から、というように、特別講義との混同がされているように思われた。後半の質問は切替がなくとも教員になっていったので支障は少なかつたと考えるもの、教員が研究方法の理解を深めることはできたものの、研究指導についてのディスカッションが少なかったと考える。研究計画審査にも関連することだと思うので、後半の目的に沿った質疑応答としては限られた時間の配分について検討してほしいなどの意見があつた。

(3)次の研究会への希望

今後も研究方法の FD 研究会を希望する（3 件）、院生も見聞を深める機会が必要（1 件）であった。

8. 評価

本研究会の目的は、混合研究法の特徴および看護研究における理解を深め、院生の研究指導に役立てるというものであったが、その目的に照らしてみると、混合研究法の理解については、講義のわかりやすさや幅広く基本から実践に至るまでの講義であったことで、大いに深まったと考えられる。しかし、研究指導力の向上の面においては、講義がわかりやすく理解は深まり、さらに今後も学習していきたいという前向きな考えも伺われ、研究指導力の向上に役立つと考えられている。

質疑応答においても、混合研究法に取り組みたい、あるいは取り組んでいるものからの質問があり、データ収集や研究方法、分析についての具体的な質問があり示唆を得られていた。一方、研究指導に関する質問については、時間の関係もあり少なく十分な検討には至らなかつたため、改善の意見があつたものと考えられる。講師との打ち合わせの段階で参加対象者である院生の質問も受ける計画にはなっていたが、短い討議時間であっても研究指導力の向上についての討議に時間を割く運営方法を模索できるとよりよかったです。

また、当日参加のできないあるいは見直しをしたい参加者のために、講師の了承を得て録画を設定した。当日参加の出来なかつた 4 名の録画視聴はなかつたが、1 名からは録画提供期間終了後に希望があつた。録画の見直しを利用した教員は 2 名であつた。録画視聴の期間の設定について学習ニーズに沿うために検討する必要がある。

以上より、本研究会の「混合研究法の特徴および看護研究における理解を深め、院生の研究指導に役立てる」ための混合研究法の理解という目的は概ね達成されたと考えるが、研究方法に役立てるという目的に即した当日の質疑応答の運営に関しては検討の余地があり、次回の運営に役立てたい。

また、今後の FD 研究会への希望として研究方法の学習ニーズが出されていたため、ニーズに合った研究会を企画運営していく。

以上